

相互利用における電子リソースへのアプローチ

～浜松医科大学附属図書館の場合～

浜松医科大学附属図書館 夏目 雅代

I. はじめに

浜松医科大学附属図書館は、開館（1978年）以来、資料の収集、保存、資料の提供と学内利用者はもとより、大学図書館や静岡県内をはじめ医療機関図書室の相互利用に努めてきた。約35年の月日が経ち、書架スペースの狭隘化、資料の陳腐化、書架のメンテナンスなどいろいろな問題が出てきた。さらに電動集密書架のある1階においては、低い立地条件による換気の悪さや湿気が多いことなどから、カビが発生しやすく、資料にとって劣悪な環境になっており、これも以前から大きな問題となっていた。

折から、資料が冊子から電子ジャーナルになり、電子資料が飛躍的に増大してきたことや、大学改革推進の一環として、学修・教育支援の強化が打ち出され、その環境整備として図書館にラーニング・commons等の設備が必要となったことなどから、平成23年～25年度にかけて電動集密書架と2階の雑誌書架の一部を撤去し、それぞれラーニング・commonsに改修することになった。

しかし、増築は見込まれないため、その対策として、電子ジャーナルのバックファイル約700タイトルを購入し、その対象雑誌を廃棄し、電子に代替えることにより、ラーニング・commonsとしての改修スペースを確保することとした。

II. 資料の推移と相互貸借

製本雑誌の多くを電子ジャーナルのバックファイルに替え、平成24年にはメディカルオンラインを導入した。また平成25年には購読外国雑誌を全て電子ジャーナルに切り替えた。さらにオープンアクセスジャーナル、機関リポジトリとして掲載されている雑誌の一部も除籍の対象とした。

電子の代替えとしての製本雑誌の廃棄、電子ジャーナルの導入・切替えなどの急激な変化により、以前から相互貸借（ILL）は全体的に依頼、受付とともに減少傾向にあったが、平成26年には初めて依頼が受付件数を上回る状況になった。（図1）

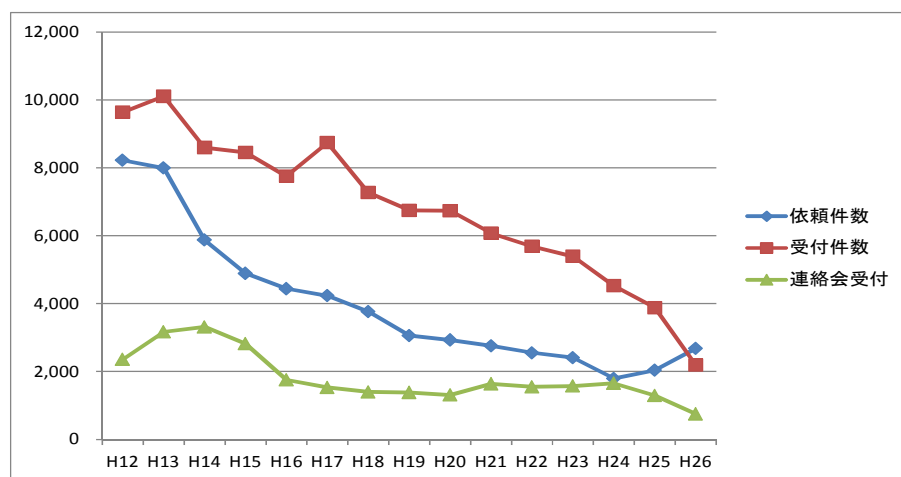


図1

Ⅲ. ILL業務の変化

雑誌（冊子）対象のILLにおいては、所蔵の確認ではNACSIS-ILLの利用とCINIIでの蔵書検索が中心であった。電子ジャーナルの文献依頼も依然NACSIS-ILLであるが、電子ジャーナルはCATに所蔵登録をしている機関は少なく、所蔵情報は限られている。電子ジャーナルの場合、パッケージごとにデータを管理しなければならないので、メンテナンスの煩雑さ、所蔵と契約情報の違いによるもの、契約情報が変わりやすいなど冊子と比べていくつかの問題点となっており、これらが所蔵情報を提供する妨げになっていると考えられる。そのため各大学機関等の電子ジャーナルリストから所蔵情報を確認することに多くの時間を割かれている。また依頼しても依頼館の電子ジャーナルの契約条件により、制限があり謝絶される場合がある。国立大学の中では医学生物系の資料であれば、外国雑誌センター館が電子ジャーナルを多く購入しているので、依頼先がセンター館に集中しやすいのが現状である。

Ⅳ. オープンアクセス・学術機関リポジトリの活用

リンクリゾルバ等の導入により、電子ジャーナルの文献そのものの確認が容易にもなってきた。PubMedによるリンクアウトによるもの、電子ジャーナルアーカイブ等の利用、対象雑誌のホームページの利用などPubMedから探せなかった文献が出版社のHPをサーチし、入手することができることもある。Google Scholarなどの検索エンジンの検索から無料のフルテキストが即座に入手できるなどアプローチの方法が広がっている。

また最近では、誰もが無料で制約なく利用できるオープンアクセス(OA)を利用する機会が多くなってきている。掲載方法も著者が費用を払って論文を公開するゴールドOAや著者自身が機関リポジトリ等に登録し(セルフアーカイブ)、論文を無料で公開するグリーンOAなど、完全無料型から、一定期間後無料公開するなど種類も多くなっている。代表的なものはPLOS ONEやPubMed Centralであり、国内ではJ-STAGEや出版社の有料雑誌の中から公開するものも増えている。

学術機関リポジトリとは、大学等の研究機関が知的生産物を電子的形態で集積、保存、無料で公開するシステムで、JAIRO(学術機関リポジトリポータル)やGoogle等の検索により無料でコンテンツを閲覧できる。

本学では機関リポジトリによる「静岡産科婦人科学会雑誌」を発刊している。論文単位の登載であり、冊子のようにOPACの所蔵をつけるデータはないため、NACSISには反映されていない。

Ⅴ. 電子リソースの共有化

学術情報のアクセスとして、電子ジャーナルリスト、リンクリゾルバ、オープンアクセス、機関リポジトリが多く利用されているが、これらのコンテンツは各大学、機関ごとの管理によるものである。これでは情報のアクセスが限定的で、ILLの検索においても非効率的である。そこで相互の電子リソースを管理するシステムの必要性が出てきた。

現在、NIIを中心にして、利用者の情報のアクセシビリティを向上し、ナビゲートする電子リソース管理データベース(ERDB)を構築するサービスが提供されつつある。この仕組みは、各大学図書館の分担入力によるものではなく、電子出版物の出版社やベンダー

等から提供を受け一括格納することが効果的とされている。(図2参照)

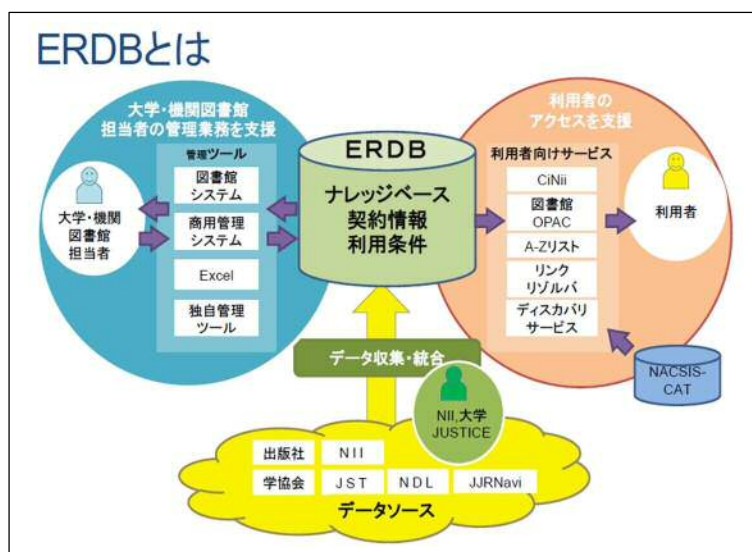


図2

出典：高橋菜奈子氏 N I I オープンハウス 2013「電子リソース管理データベース (ERDB) プロジェクトはじめの第一歩」発表資料より

VI. 今後に向けて

昨秋、N I I は CiNii Articles を所蔵情報のみに止まらず、雑誌詳細表示画面から電子リソース本文へリンクするサービスを開始した。2015年4月には ERDB-JP が公開された。これらは機関で登録することにより、国内で発行されている電子ジャーナル等の一覧を入手・利用することができ、タイトルリストを作成したり、図書館システムに取り込んで OPAC で検索して利用することができる。

電子ジャーナルの収集、蓄積、データの共有化を図るうえで、今後はオープンアクセスの増加、機関ジボトリの発展とともに、ますます電子リソースの登録・管理の重要性が増してくる。ERDB が図書館業務の効率化、軽減化、特に I L L の利便性に繋がることに期待したいが、コンテンツの構築にはまだ時間がかかると思われる。

今後、さらに利用者からは電子リソースへ容易にアプローチできるよう対応が求められ、それとともに図書館業務も変容していくのではないかと考えられる。

参考文献

1. 深川昌彦 DRF 技術ワークショップ in 熊本 平成 23 年 2 月
2. 電子環境下における今後の学術情報システムに向けて 国立大学図書館協会 学術情報委員会 学術情報システム検討小委員会報告書 平成 23 年 11 月
3. 三根慎二 オープンアクセスジャーナルの現状 大学図書館研究 vol.80,2007,p54-64
4. 杉田茂樹 Open Access はどこまで進んだのか(1) SPARC Japan NewsLetter No.14
5. ERDB-JP: 共同で構築する電子リソース共有サービス カレントアウェネス No.282

この報告は「平成 27 年度第 1 回静岡県医療機関図書室連絡会研修会」で発表した内容を加筆、修正したものである。